

低温少照が続き初期登熟は遅れている 登熟を進める水管理と防除対策が重要

平成15年8月22日
やまがたこだわり安心米推進運動本部

1 生育概況

県平均の出穂盛期は8月10日で平年より5日遅い。また、8月中旬の低温により出穂終期は8月19日で平年より9日遅くなつた。

穂揃期の生育調査（生育診断ほ）によれば、平坦部「はえぬき」の m^2 当たり穂数は平年に比べやや多く、一穂粒数はやや少なく、 m^2 当たり粒数は並からやや多い。

また、7月下旬の低温により早生品種を中心として障害型不稔の発生が多くなつてゐる。さらに、8月中旬の低温で出穂期が遅れているほ場では、登熟の遅れが心配されている。

表1 出穂期の状況

農業普及課調べ

地域区	出穂始期		出穂盛期		出穂終期	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年
県平均	8/6	7/31	8/10	8/5	8/19	8/11
村山	8/6	8/1	8/10	8/5	8/17	8/11
最上	8/5	7/29	8/11	8/5	8/20	8/11
置賜	8/5	7/31	8/11	8/5	8/22	8/13
庄内	8/7	7/31	8/10	8/3	8/19	8/8

表2 生育診断ほの概況

農業普及課調べ

地帯	品種名	年次	出穂期 月日	m^2 あたり 粒数	穂数 本/ m^2	一穂 粒数
平坦部	はえぬき	本年	8/10	35,300	547	64.4
		平年比	+6日	102	104	98
中山間部	あきた こまち	本年	8/9	33,000	456	72.4
		平年比	+5日	104	102	100

平坦部：8力所平均 中山間部：4力所平均

2 気象概況

8月中旬以降の気象は、平均気温は平年より低く日照時間は平年より短く、降水量は平年より多く経過している。

8月15日発表の東北地方1か月予報によれば、向こう1か月間の気温、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

3 当面の技術対策

本年は、中干しが不十分で根の活力が弱く、出穂前後の低温や日照不足により初期登熟は遅れていることから、以下の点に留意し、登熟を進める取り組みを強化する。

(1) 登熟を向上させる水管理の励行

間断かん水（2湛2落）を励行して根の活力を維持し、登熟促進に努める。また、登熟期間に高温が続くと玄米が白く濁って品質が低下しやすくなることから、天候が回復して高温が続く場合は湛水状態を保つ。フェーン現象及び台風等の強風が吹く場合は、速やかに湛水管理を行って稻体の消耗を防ぐ。

落水時期は、普通田で出穂後30日、排水不良田で25日、砂質系で保水の劣る水田では35日程度を目安とし、水管理により高い登熟を確保するため早期落水は絶対に行わない。なお、出穂期が遅れた地域では、関係機関と協議して登熟期間の用水確保を図る。

(2) 病害虫防除の徹底

斑点米カメムシの発生は多く、7月2日と8月11日に注意報が発表されている。現在水田周辺での密度が高く、水田内への進入が始まっている。また、7月以降の天候不順により割粒の発生が心配されている。

薬剤防除は、穂揃期後7～10日の防除（基本防除2回目）を、畦畔を含めて必ず実施する。基本防除実施後も水田内のすくい取りを行い、飛来や生息が確認された場合は特別防除を実施する。水田周辺を除草する場合は、水田内の薬剤散布前に行う。

長期間にわたって日照不足が続いたことから稻の体質は弱く、全域で葉いもちの病斑の上位葉への進展が見られており、最上地域と置賜地域では葉いもちの発生ほ場が増加していることから、8月22日に穂いもちの注意報が発表された。

従って、穂揃期防除が計画どおりできなかったところでは、早急に実施する。また、ほ場をよく観察し、上位葉に病斑が多い場合は穂揃い期防除の7日後に、時期が遅れないよう追加防除を実施する。

(3) 適期刈り取りの推進

本年の刈り取りにあたっては、 m^2 あたり粒数、不稔歩合、穂揃い期間の長短、出穂期の早晚、登熟期間の気温、登熟進度等を総合的に判断して決定する。特に、不稔歩合が高い場合は有効な粒数が少なくなるため刈り取り時期が前進する。従って、関係機関の出す情報に注目し、刈り遅れることのないようコンバインや乾燥機の整備点検を急ぐ。特に共同乾燥施設では、ほ場の状況を早期に調査把握した上で刈り取り計画を立て、適期刈り取りを励行する。

「いらがい農業は使わぬ！ 使う場合は適正に！ 使ったら記帳する！」